古代・中世の船場地域の景観

松尾　信裕

要旨　豊臣秀吉が晩年に建設した城下町に大坂城下町がある。この大坂城下町の下層には、中世や古代、さらには弥生時代まで遡る遺跡が埋没している。各時代の遺跡の分布から大坂城下町が建設されるまでの大阪の景観を復元していく。そして、それぞれの時代の遺跡の特徴から大阪の都市化の歴史を踏まえて、近世城下町大坂への発展過程を明らかにする。

はじめに

商業地として豊臣期に開発された大阪市の船場地域には、豊臣期の町屋の下層にそれ以前の遺跡が埋没していることが大坂城下町跡の発掘調査で明らかになり［大阪市文化財協会2004］、その分布状態や時代による変化を報告したことがあった［松尾信裕2004a］。今回は、それ以降に行われた発掘調査によって得られた成果を盛り込んで、再度、船場地域の下層に埋もれている弥生時代から中世の遺跡の分布を検討し、豊臣期以前の船場地域の集落や土地利用について再考したい。

豊臣期に新たに開発された船場城下町の範囲内で発掘調査に着手したのは31年前になる。その範囲の西端は御堂筋より一筋東の心斎橋筋までで、南端は博労町通りか順慶町通り付近までであったため、その範囲に調査地点が集中している。その範囲を越えて発掘調査地点が西や南に展開したのは、つい近年のことである。1990年代前半には長堀川跡の南に位置する島之内の北東角にある住友長堀銅吹所跡を発掘調査しているが、この調査は著名な近世銅吹所跡という性格であったために、その敷地に限って調査を行ったもので希有の例であろう［大阪市文化財協会1998］。

当初設定された船場城下町の範囲を越えて発掘調査が行われるようになったのは、2005年度からであろうか。2005年に大坂城下町跡の範囲の西側に位置する大阪市中央区今橋４丁目に所在する、旧愛日小学校跡地で今橋４丁目所在遺跡（IB05-1）として調査が行われている。その後も靱本町１丁目所在遺跡（UT08-1）や島之内２丁目所在遺跡（SI11-1）・東心斎橋1丁目所在遺跡（HB13-1）などの調査が行われるようになっている。それら大坂城下町跡の範囲外での調査でも近世の町屋遺構が発見され、豊臣期の城下町が当初に建設された範囲［伊藤毅1987・内田九州男1989］から、次第に拡大していったと想定できるようになった［豆谷浩之・南秀雄2015］。

大坂城下町跡の範囲を越えて行われている発掘調査の事例が増える中、大坂城下町跡の調査でも豊臣期以前の遺跡が発見される調査事例が増加してきている。それらの調査成果を一つ一つ見ていくと、豊臣期に新たに造成された船場地域の大坂城下町の前身となる中世の集落の存在がうかがえるようになってきた［松尾2004a］。2004年段階では中世の港湾都市渡辺津との関係を述べて、船場の大坂城下

大阪歴史博物館　研究紀要
第16号　19－32ページ　2018年3月

N
土佐堀川
IB05-1
高麗橋通り
伏見町通り
道修町通り
平野町通り
淡路町通り
瓦町通り
備後町通り
安土町通り
本町通り
南本町通り
唐物町通り
北久太郎町通り
北久宝寺町通り
南久宝寺町通り
西横堀川跡
東横堀川
長堀川跡
御堂筋
心斎橋筋
井池筋
柿木橋筋
中橋筋
難波橋筋
堺筋
八百屋町筋
丁目筋
薬屋町筋
08-2
11-5
13-3
13-4
96-14
92-1
92-18
91-11
05-8
AZ87-5
OS86-20
91-2
92-22
OS88-82
05-6
92-36
97-1
00-13
93-7
92-25
05-7
92-20
08-4
16-1
11-3
06-1
92-24
92-33
02-3
05-1
08-6
99-7
06-6
97-6
98-8
OS87-153
96-11
97-7
00-4
02-2
95-8
99-2
95-4
92-17
UT08-1
05-9
07-11
09-1
91-24
HB13-1
HB14-1
DB90-1
0
1000m

図１　関連調査地位置図

町跡下層に展開しているのは渡辺津に関わる集落ではないかと想定したが、中世の遺構分布からは、大川両岸に立地していたと考えられる渡辺津だけに限定するのではなく、それ以外の中世集落との関連をも検討する必要があると考えるようになった。

以下では船場地域の大坂城下町跡下層で見つかる遺構や遺物の時期とその分布から、弥生時代から中世末までの大阪の景観を俯瞰するものである。

発掘調査地点は船場地域の全域に満遍なく広がっており、中世以前の古代や古墳時代まで遡る遺構や遺物が出土する地点が存在している（図１）。それらの調査地の分布をみていくことで、大坂城下町以前の大阪の姿を復元することが可能となる。

１．弥生時代から古墳時代の遺跡

ここでは弥生時代から古墳時代の遺構や遺物が出土した調査地点を検討する。それらの地点の分布をみると東の堺筋より東の道修町１丁目付近と、西の梅檀木橋筋沿いの東西二つに偏在している（図２）。以下では東グループと西グループに分けて記述を進める。

東グループで弥生時代末から古墳時代初頭の土器が出土する地点は、６ヵ所ほどある。堺筋の西側街区にあたる瓦町２丁目にあるOJ99-7は庄内式土器や古墳時代の布留式土器や埴輪は出土しているが、同時期の遺構は見つかっていない。この地点以外に古墳時代の遺物だけが出土する地点として、船場地域の北東端の東横堀川に近接するOS86-20やAZ87-5・OJ91-11等がある。これらは水成の自然堆積層から出土

図２　弥生時代から古墳時代の調査地

している資料で、大川の流れが運んできたものと考える。東横堀川に近い南本町１丁目のOJ92-17では平安時代の地層から古墳時代の石製容器の蓋が出土している。これは上町台地上にあった古墳に埋められていたものではないだろうか。これら東グループは遺構を伴うのではなく、水成砂層や後世の地層の中に弥生時代や古墳時代の遺物が含まれている地点で、他所から運ばれてきた地層の中に含まれている。

西グループでは、栴檀木橋筋の西側街区にあたるOS88-82で弥生時代末から古墳時代初頭の土器が多数出土している。調査では明瞭な遺構は検出できなかったが、土壙状の落ち込みが存在していた可能性が高い。この南方で、同じく栴檀木橋筋の西側街区にあるOJ98-8では弥生時代末から古墳時代初頭の土器と銅鏃が出土する土壙が見つかった。銅鏃はこの地点の南の街区にあるOJ16-1でも近世の地層から遊離した状態で１点出土している。ここは後述するように古代から近世の遺構や地層が累積しており、古墳時代の遺構や地層は後世の遺構や地層で削平されている可能性がある。さらに南方の、栴檀木橋筋より二つ西側の街区にあるOJ00-4では弥生時代末から古墳時代初頭の土壙やピットが点在している。同じく栴檀木橋筋の西側街区にあるOJ09-1でも弥生時代末から古墳時代初頭の庄内式土器や布留式土器を含む土壙が数基見つかっている。

この時期の遺構が見つかった地点をみると、栴檀木橋筋と西の心斎橋筋に挟まれた街区に南北方向に連なって分布していることに気付く。上町台地から距離を置いて、栴檀木橋筋の西に南北に並ぶ様は、この時代にこの付近までは陸化していたことを物語り、海岸線が心斎橋筋よりも西に存在していたと想定できる。遺構が発見されている上記の地点は、周囲よりも高くなっていたと想定でき、大阪湾に面する砂丘の上に人々の生活場所が営まれていたのであろう。大阪湾に面するこの一帯は冬になると強い西風に吹き曝される場所であるが、大阪湾を生業の場所として選択した人々がこの海岸付近に集落を営んでいたようだ。上記の弥生時代末から古墳時代初頭の遺構検出地点からは筒型の土錘が複数地点から出土しており、海とのかかわりが強かったことをうかがわせる。

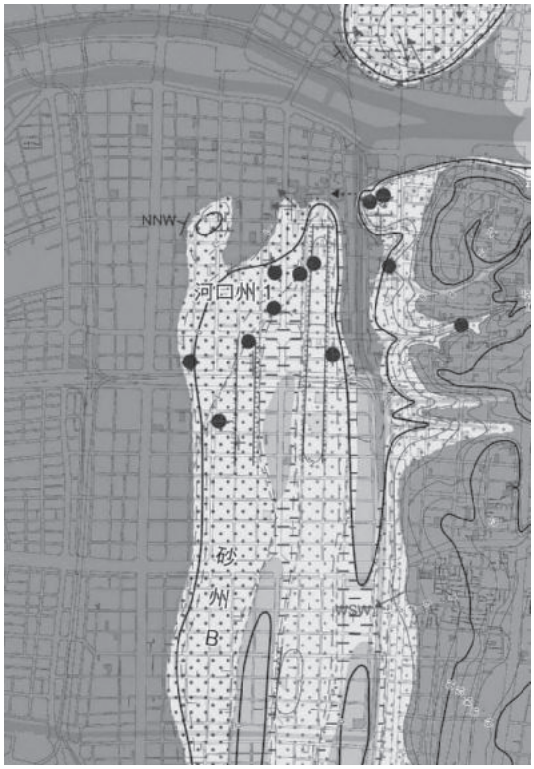

図３　弥生時代後期古地理図（部分）［大阪文化財研究所・大阪歴史博物館2014］より転載

後世の地層の中に遺物が含まれるだけの東グループが分布する地域は、生活を営むには環境が恵まれていなかったのだろう。弥生時代後期の大阪の古地理図でも御堂筋より二筋東の井池筋付近まで陸化していたと復元している（図３）［大阪文化財研究所・大阪歴史博物館2014］。その図では海岸砂丘の東にあたる船場中央部付近には、後背湿地や水域が復元されている。

上町台地北端部では弥生時代末から古墳時代初頭の遺跡は、上町台地東裾にある森の宮遺跡が知られるが、それ以外に当該期の遺跡はこの西グループしか知られ

ていない。この地域から出土する当該期の遺物は、周辺の遺跡が削平されてそこから運ばれた遺物群の可能性がある。

この地域では古墳時代初頭には遺構が見つかることで人々の活動が活発であったことをうかがわせるが、古墳時代中期以降になると、生活痕跡は希薄になる。５～６世紀代の土器や埴輪は出土するが、それらも水成層や後世の地層から出土しているもので、船場地域の大坂城下町跡下層の東にある上町台地に存在している遺跡地から運ばれてきた可能性が高い。この時期は上町台地北端部に法円坂倉庫群が造営されており、その周辺には須恵器生産やガラス玉生産、鍛冶工房など様々な手工業を行っている集落が存在していると想定されている［田中清美2014］。５世紀代以降、人々は大阪湾岸を離れて東の上町台地上にその活動拠点を移動させたと推測する［松尾2014］。

２．古代の遺跡

古墳時代の後、この地に活動痕跡が見いだせるのは奈良時代から平安時代初頭である。この時期になると、船場地域の道修町から唐物町の間で遺構が見つかるようになる（図４）。

堺筋の東に位置する道修町１丁目のOJ91-11では、６世紀代から７世紀代の土器が大量に出土している。遺構は見つからず、土器は水成砂層からの出土である。ここで見つかった土器群はOJ91-11よりも東の、上町台地北西部付近から大川の流れに乗って運ばれてきた土器ではないかと考えている。

OJ92-18では平安時代初頭の、北で西に振る道路側溝と推定できる平行する２条の溝や井戸・土坑が見つかっている。建物は復元できなかったが、ピットも多数あり、生活空間として利用されている。堺筋の西側街区になる道修町２丁目のOJ05-8では、平安時代初頭の溝や土坑が見つかっている。包含層からは土

図４　古代の調査地

器が多数出土した。同じく堺筋の西側街区になる淡路町２丁目のOJ06-1では、平安時代初頭の井戸が見つかった。堺筋の西側街区にあたる瓦町２丁目にあるOJ92-33では平安時代の井戸が３基も見つかっている。堺筋に面するOJ99-7では奈良時代の土器が出土しているが、遺構は見つかっていない。

堺筋より２街区東にある淡路町１丁目のOJ05-7では、平安時代初頭の３基の井戸や土坑が見つかった。また、平安時代末から鎌倉時代初頭の土壙も点在する。OJ05-7の南にあるOJ02-3では奈良時代末から平安時代初めの土器を含む土壙や井戸が見つかっている。少し南に行ったOJ96-11では奈良時代末の井戸が２基見つかっている。東横堀川に接するOJ97-7では湿地堆積の中から平安時代の土器と平面が楕円形の曲げ物が出土した。東横堀川の前身と推定される湿地の堆積層だろう。

目を転じて梅檀木橋筋の西にある調査地を概観する。弥生時代末から古墳時代初頭の土器が多数出土したOS88-82では、平安時代初頭の土器や緑釉陶器が出土した土壙が見つかっている。この地点の北街区にある道修町３丁目のOJ13-3では、平安時代初頭の土壙が多数見つかっている。これら土壙のいくつかは、北で西に振る方向に約２ｍの間隔で並んでいることから、塀の可能性も考えられている。梅檀木橋筋の二つ西側街区にあたる平野町３丁目にあるOJ92-22では、平安時代の緑釉陶器の火舎が見つかっているほか、土器・瓦・隆平永宝を出土した土壙や柱穴が広がっている。同じく梅檀木橋筋の二つ西側街区淡路町３丁目のOJ97-1では、平安時代初頭の溝と井戸２基が見つかった。溝は北で西に８度振る。近世の地層から銅鏃が出土した瓦町３丁目にあるOJ16-1では、自然堆積の砂層の上位に平安時代初頭の井戸や溝があり、多くの土器が出土している。須恵質の風字硯や墨書土器も出土している。梅檀木橋筋の二つ西側街区で瓦町３丁目のOJ08-6では、平安時代初頭の掘立柱建物１棟と隅丸方形の土壙を複数検出した。建物の方位は北で西に振る。梅檀木橋筋の一つ西側街区の安土町３丁目にあるOJ98-8では、奈良時代の掘立柱建物が見つかった。この柱穴は隅丸方形ではなく、大小様々な不整円形のピットであった。OJ97-6では黒色土器を含む土壙や土師器須恵器を含むピットが見つかっている。梅檀木橋筋の二つ西側街区で本町３丁目にあるOJ00-4では、飛鳥時代から奈良時代の土壙やピットが見つかっている。東方のOJ02-2では土師器や須恵器を含む土壙が５基見つかっている。梅檀木橋筋の二つ西側街区にあたる南本町３丁目のOJ95-8では、土壙や溝を検出した。溝は東で北に振る方向で並行しており、耕作溝と考える。ここでは古墳時代に遡る土器や埴輪も出土している。こうした遺構が見つかった地点以外に、南本町３丁目のOJ99-2では奈良時代の土器を含む包含層が広がっている。

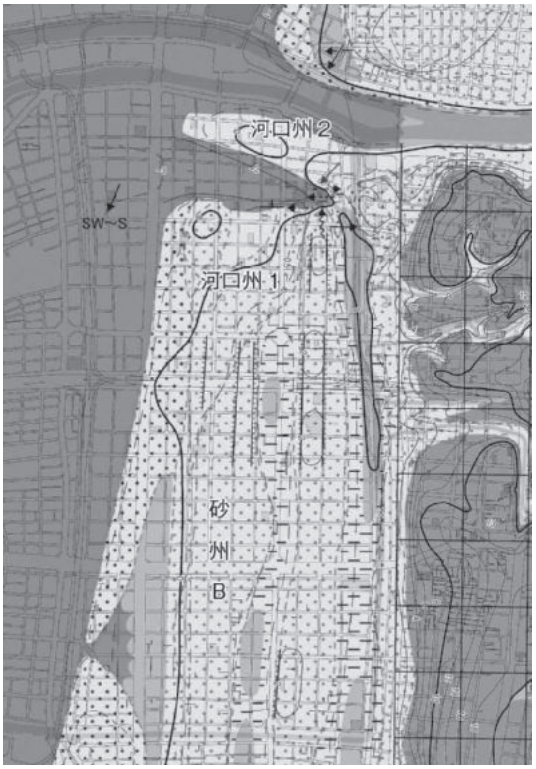

図５　古代古地理図（部分）［大阪文化財研究所・大阪歴史博物館2014］より転載

古代においては、北は道修町から、南の唐物町までの船場地域に井戸や土壙、柱穴と考えられるピットが

見つかっている。弥生時代末から古墳時代初頭においては井池筋付近の地下に埋没している砂丘上に南北に集落が立地していたが、古代になるとその範囲だけでなく、その東側の低地であった範囲にも遺構が営まれるようになっている。古代の大阪の古地理図（図５）でも海岸砂丘の東側の低地部にあった水域が狭くなり、生活空間が拡大していると復元されている［大文研・大阪歴博2014］。このように上町台地を離れた西側の海岸平野が生活空間として利用された理由に、古代の難波津の存在が挙げられよう。

難波津は古墳時代に淵源を持つ港津で、上町台地北端部の大川南岸に存在していたと推定されている。上町台地北端に古墳時代の法円坂倉庫群が発見されたことで、その存在が古墳時代まで遡るのではないかと想定されている［積山洋・南秀雄1991］。また、古墳時代末から飛鳥時代にかけては法円坂倉庫群が廃絶したのちにも、その一帯に難波宮下層遺跡と呼ぶ古代遺跡が存在しており、それらを複合的な都市遺跡と捉え「難波屯倉」と想定されている［南秀雄2014・栄原永遠男2017］。その「難波屯倉」は港湾施設を持っており、それが難波津と呼ばれていたと考える。

難波津は古墳時代以降、飛鳥時代や奈良時代になっても上町台地北端部の大川南岸に存在していたと推定できる。奈良時代の難波には藤原豊成の宅をはじめ、貴族の経済活動拠点としての「宅」が置かれていたようで、こうした貴族たちの経済活動の拠点が船場地域の大川沿いに展開していたのであろう。難波宮廃都後も西国との水上交通の拠点として港湾機能が維持されていたのだ。船場地域の大坂城下町の下層に埋もれる古代の遺構発見地はそうした性格の遺跡も含まれると推定する。

平安時代以後も「11世紀末の院政期、朝廷の御厨子所領の摂津大江御厨に包摂されていた渡辺および津村郷の地に非開発領主型で水軍も兼ねた武士団であった渡辺党と呼ばれる二家の武士団が住みつき（以下略）」（『新修大阪市史』第２巻15ページ）とあり、古代の集落が中世集落へと変容して渡辺に継続すると考えている。

この地域で古代の遺構が発見された調査地は、８世紀末から９世紀代の奈良時代末から平安時代初頭の遺物が出土する地点が多い。この時期には上町台地上にはすでに宮都としての難波宮は存在しておらず、摂津国府あるいは、難波津の後身にあたる港湾施設があった。国府は上町台地北端部に推定されており、船場より東に１㎞程離れた台地上にあった。

難波津の港湾施設がどこに存在していたのか多くの説があるが、筆者は東横堀川北端部の東西に広がる低地部に埋没している旧大川岸に存在したと考えている［松尾2014］。大川は弥生時代以来、流路を北に少しずつ移動させたようで、弥生時代には南岸の位置が道修町通り付近であったが、その後次第に北に移動して、古代には高麗橋通りや今橋通り付近に存在したと推定されている［大文研・大阪歴博2014］。そしてその自然堤防の背後にあたる道修町通り付近に、大阪湾から水域が入り込んでいたと推定されている。

この一帯に難波津やその後身の港湾施設である「国府の渡」や「大江の渡」あるいは「久保津」「渡辺津」と呼ばれていく港津があったと推定する。そして先に述べた古代遺構発見地はその背後の低地部に展開している。それらは北の大川沿いにあった港津に付随する貴族の「宅」や「久保津庄」に関わる屋敷の痕跡ではないだろうか。

それらの地点は１㎞もない範囲に分布しており、それぞれは見通せる距離にある。北東部では遺構は濃密に見つかっているが、それは長期にわたる遺構が重複しているとみてよい。それ以外ではある程度の距離を置いて分布する。こうした分布状況から、平安時代に多い、一坪に一在家を基調とする散居村的な集落［植木久1982］がこの一帯にも展開していると考えられる。

また、この一帯で見つかる溝や柱列などは北で約8度西に振っており、共通した遺構方位を持っている。これは明治年間に陸軍陸地測量部が制作した地形図で見ると、神崎川より南の大阪市域北部一帯に見出せる方向である（図６）。地形図にあるこの方向の溝や道路は西成郡に施工された条里地割と推定できる［松尾2010］。

３．中世の遺跡

平安時代末から鎌倉時代そして室町時代にかけての遺跡を概観する（図７）。

北東部のAZ87-5・OS86-20・OJ91-2・92-18では鎌倉時代から室町時代のピットや土坑井戸・溝などの遺構が濃密に見つかっている。OJ92-18では北で西に振る室町時代の掘立柱建物があった。明らかに居住空間として利用されている。こうした成果から、この一帯を渡辺津の一角と推定した［松尾2004a］。

図６　大阪市域北部の地形図（明治18年測量「1:20000仮製地図」）

堺筋の西になる伏見町２丁目のOJ92-1では16世紀前半まで耕作地だったようで、東で北に振る溝や畦畔が見つかっている。その上位には幅５m、深さ１m程の南北堀があった。同じ規模の堀が東のOJ91-2や西のOJ94-16でも見つかっている。OJ94-16の堀は幅５m、深さ0.6mで、堀底にシジミの殻が投棄されていた。これらの堀は規模が大きいことから、居住空間を囲む環濠の可能性も考えられるが、それぞれが延長線上に位置するのではなく、いずれも並行するように南北方向に延びており、一連の環濠とは言い難い点がある。

道修町２丁目のOJ05-8では12世紀代の中国製白磁や瓦器椀が出土している。ピットは見つかっているが、遺構の密度は低く、長期間にわたる居住空間ではなさそうだ。この南にあるOJ93-7では室町時代（13～15世紀）の小規模貝塚が見つかっている。南東に離れた淡路町１丁目のOJ05-7では、12世紀代の瓦器が出土する溝や井戸・土坑が見つかった。建物を復元できる柱穴はない。

堺筋に面する淡路町２丁目のOJ06-1では、北で西に振る掘立柱建物が２棟重複して見つかった。柱穴は小型で円形を呈する。出土遺物には12世紀代の土師器皿や瓦器椀、中国製白磁碗がある。南に隣接するOJ92-33では13世紀代の瓦質足釜が出土する土壙が見つかっている。さらに南の街区にあるOJ99-7では13世紀代の瓦器椀が出土している。この付近の調査地からは12世紀代の瓦器椀が出土し、それ以降の青磁や瓦質土器が出土する地点は少ない。南方のOJ96-11では中世と推定できる井戸と耕作の畝間溝と推定されている溝が見つかっている。

梅檀木橋筋の西側になる平野町３丁目のOJ92-22では、瓦器を含む地層は広がっているが、遺構は見つかっていない。瓦町３丁目のOJ16-1では土壙を２基検出している。OJ08-6では東で北に振る方位の並行する溝が広がる。耕作地だったようだ。OJ97-6では瓦器が出土する土壙が見つかっている。OJ00-4では北で西に振る中世の自然流路が数条重複するように見つ

図７　中世の調査地

かった。一つの大きな流路になるのかもしれない。OJ99-2では室町時代後半期（15世紀後半）の溝があった。溝は北で西に15度振っている。OJ95-8では幅５m、深さ１m程の東西方向の堀を検出している。この堀は東30m地点のOJ99-2では見つかっておらず、途中で途切れてしまうか、方向を変えるようである。御堂筋より西の道修町４丁目の西横堀川跡に近いOJ08-2では、室町時代の耕作土上にヒトの足跡が見つかった。

中世の遺跡は古代に遺構が見つかった地点の広がりとほぼ同じ広がりで遺物は出土するが、住居に関わる遺構が見つかった地点の分布範囲は狭くなり、北東部に集中する傾向がある。南西部および南東部では井戸や土壙などが多く、建物を構成する柱穴が見つかる地点は少なく、耕作地が広がるような地域になっているようだ。この傾向から考えて、この段階には居住空間が、大川岸に接する北東部の平野町以北に集中していった可能性がある。その一帯が渡辺津の集落域と想定でき、周囲には耕作地や低湿地が広がっていたのであろう。

周囲に点在する遺物出土地点を考える時、平安時代以降にこの地にあったとされる「久保津庄」「津村郷」と呼ばれる集落が念頭に浮かぶ。鎌倉時代以降の瓦器や瓦質土器が出土する上記の地点は、古代の遺構発見地点と比べるとその地点は減少し、希薄ではあるが分布範囲は重なっている。それらは一坪内に建物が集中する集村になっているようではなく、環濠で囲まれた中に存在しているようでもない。その姿は耕作地が広がる景観となっているようだ。そしてこれらの地点からは中世末の遺物が出土しないことから、その段階には集落はこの地域から別の地点へと移動しているのではないだろうか。移動した地点として想定するのが御堂筋の西にある津村や上難波村であり、中世後半に集村化を果たした村落であった。

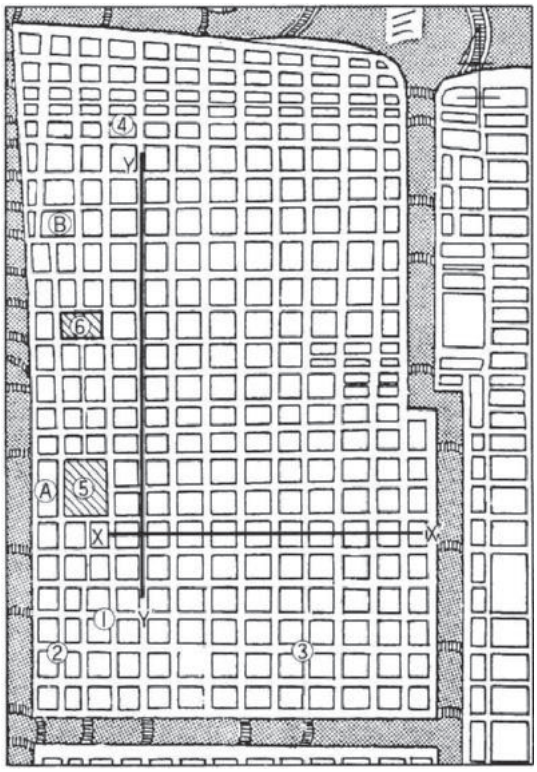

図８　『明暦元年大坂三郷町絵図』にみられる惣尻切丁の位置（［内田九州男1985］より転載

４．近世初頭の村の変容

豊臣秀吉が没する慶長３年（1598）、大坂では東横堀川の西に、大坂城下町跡として周知されている船場城下町が造成される。その範囲は東が東横堀川、西が心斎橋筋、北が伏見町通り、南が南本町通りまでと考えている［松尾2004b］。この範囲およびその周辺で行われた発掘調査を振り返ってきて、城下町以前の集落は船場地域北東部に集中しているのが再確認できた。そして、それ以外の地域では幾つかの土壙が点在する程度か、耕作地が広がる状況であった。こうした事実から考えられるのは、慶長3年における船場地域での城下町造成は、北東部にあった中世集落の渡辺を新たな街区を敷設することで城下町に取り込み、それ以外

の地域では耕作地か低湿地を埋め立てて造成していると考えられる。そしてこの段階でも心斎橋筋以西に存在していた中世以来の津村や上難波村は、新設城下町の西側に取り残され、中世の街区形態をとどめた村落として展開していた。慶長３年造成の船場の範囲は、「明暦元年大坂三郷町絵図」の心斎橋筋にあたる位置に「惣尻切丁」と記載されていることから、そこまでと推定されている（図８）［内田1985］。この段階には津村や上難波村は大坂の外にある農村として存続している。

この前年の慶長２年、津村に接するように本願寺津村別院が建立され、翌慶長３年には上難波村に接して難波別院が建立された。この二つの寺院も低湿地を避け、弥生時代に形成された砂丘の上に立地している。低湿地や耕作地が広がる船場中央部に建立せずに、津村や上難波村が立地する南北方向の砂丘上に建立されたのは、この段階で既に船場に城下町を造成するという豊臣政権の方針があって、その範囲を避けるように選地させられた可能性もある。

船場が豊臣期の城下町として開発されて以降、その西側に武家屋敷と推定される屋敷が建設されていたようだ。御堂筋の西、平野町４丁目に鎮座する御霊神社は石見国津和野藩亀井茲矩の屋敷があった所と伝え、道修町４丁目の北街区で調査したOJ08-2では、道修町通りまで広がる大規模な礎石建物を発見している。町人地も心斎橋筋を西に越えて拡大したようで、北の今橋通り４丁目のIB05-1や、さらに南方で西横堀川を西に越えた靱本町１丁目のUT08-1では大坂冬の陣で焼失した町屋の遺構が見つかっている。

武家屋敷が船場の西に進出してくる背景には、五奉行の一人である石田三成の佐和山城蟄居後の慶長４年に、徳川家康が大坂城に入ってきたことも大きな要因と考える。家康が伏見から大坂に入ってきたことで、伏見にいた諸大名も家康に伺候するために大坂に移住してきて、伏見は「荒野ニ罷成可躰候」（島津義弘書状）と記されるまでになった［横田冬彦2001］。政治の中心が伏見から大坂に戻ってきたのである。この段階では大坂城周辺部

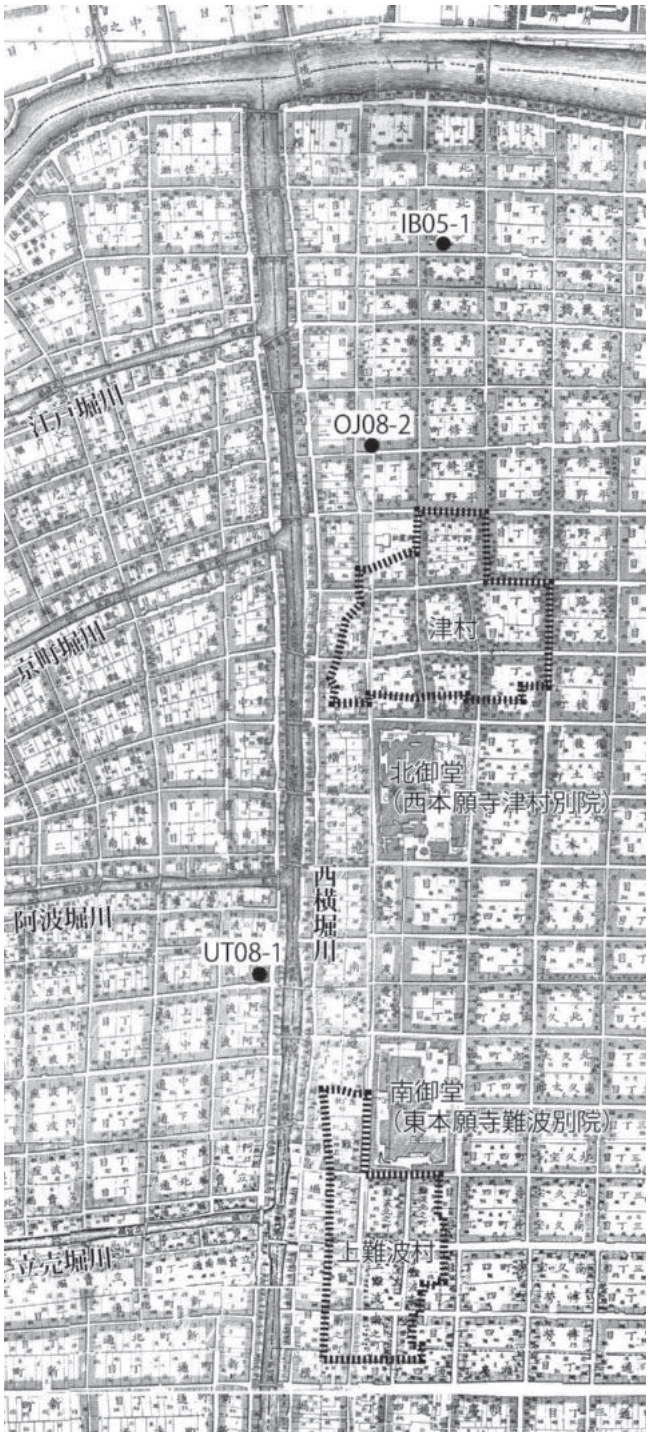

図９　『大阪実測図』にみる津村・上難波の位置

の上町には広大な武家屋敷を構える余地がなく、大坂の市街地の縁辺部に屋敷地を求めたのではないだろうか。翌慶長５年には、津村や上難波村の西に阿波座堀川と西横堀川が開削され、この一帯の市街地化がさらに促進されたと考える。しかしこの段階ではまだ津村や上難波村は新市街地の中に中世集落の旧態依然とした街区構造を保っていた。そして慶長19年と20年の大坂の陣を迎えることになった。

おわりに

大坂の陣の直後から、大坂は松平忠明によって市街地の復興事業が進められた。焼け跡の整理や中断していた道頓堀川の開削工事が完了し、元和３年（1617）には西横堀川の西に江戸堀が掘られ、市街地が西へと広がっていった。その一方で、大坂城南方の上町台地にあった豊臣初期に建設された南北平野町は大坂城下町から外れ、村となった。

徳川幕府は大坂を復興させるにあたって、それまでの市街地の範囲を大阪湾方面へと拡大させていった。それは大阪湾から瀬戸内海を介して西国に通じる大坂の立地条件に着目し、港湾機能をさらに充実させ大坂を西日本の水上交通の窓口とした。その手段として大坂を西へと拡大発展させていった。

元和６年（1620)、大坂は徳川幕府直轄地となり、幕府主導の市街地開発が促進された。この時、新市街地の中に孤立していた津村や上難波村は解体され、大坂三郷の中に含まれることになった。しかし、その街区構造は旧態を留めて近代の地形図に見出せる（図９）

参考文献

伊藤毅1987、『近世大坂成立史論』、生活史研究所
内田九州男1985、「城下町大坂」『日本名城集成　大坂城』、小学館
内田九州男1989、「豊臣秀吉の大坂建設」佐久間貴士編『よみがえる中世』２　本願寺から天下一へ　大坂、平凡社
植木久1982、「長原遺跡に見る平安～鎌倉時代集落・民家の特徴」大阪市文化財協会編『長原遺跡発掘調査報告』Ⅱ
大阪市1988、『新修大阪市史』第２巻
大阪市文化財協会1998、『住友銅吹所跡発掘調査報告』
大阪市文化財協会2004、『大坂城下町跡』Ⅱ
大阪文化財研究所・大阪歴史博物館2014、『平成21～25年度（独）日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（A）大阪上町台地の総合的研究―東アジア史における都市の誕生・成長・再生の一類型―』
栄原永遠男2017、「難波屯倉と古代王権」『大阪歴史博物館研究紀要』第15号、大阪歴史博物館
積山洋・南秀雄1991、「ふたつの倉庫群」直木孝次郎・小笠原好彦編『クラと古代王権』、ミネルヴァ書房
田中清美2014、「難波宮成立前夜の上町台地北部の手工業生産と流通」（公財）大阪市博物館協会大阪文化財研究所・大阪歴史博物館編、平成21～25年度（独）日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（A）『大阪上町台地の総合的研究』
松尾信裕2004a、「大坂城下町下層の遺跡」大阪市文化財協会編『大坂城下町跡』Ⅱ
松尾信裕2004b、「大坂城下町の町割」大阪市文化財協会編『大坂城下町跡』Ⅱ
松尾信裕2010、「中世大阪三都から城下町大坂へ」小野正敏・五味文彦・萩原三雄編『中世はどう変わったか』、高志書院

松尾信裕2014、「古代難波の地形環境と難波津」中尾芳治・栄原永遠男編『難波宮と都城制』、吉川弘文館
豆谷浩之・南秀雄2015、「豊臣時代の大坂城下町」大阪市立大学豊臣期大坂研究会編『秀吉と大坂』、和泉書院
南秀雄2014、「難波屯倉と上町台地北部の都市形成」（公財）大阪市博物館協会大阪文化財研究所・大阪歴史博物館編、平成21～25年度（独）日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（A）『大阪上町台地の総合的研究』
横田冬彦2001、「豊臣政権と首都」日本史研究会編『豊臣秀吉と京都』、図書出版文理閣

Landscape of Senba Area during Ancient and Medieval Period

MATSUO Nobuhiro

In the basement of Osaka castle town, ruins of medieval, ancient, and Yayoi era are buried.

This report restores the landscape of Osaka before Osaka castle town was built based on the distribution of ruins of each era.

And from the distribution of ruins of each era, we will clarify the development process to the Osaka castle town in the modern age.